神奈川県
内水面試験場コラム
https://www.pref.kanagawa.jp/docs/a4y/koramu/2022koramu.html
令和７年12月10日

川の魚も冬支度

この時期になると、各家庭の庭先や商店街にクリスマスツリーやサンタクロースが飾られて、本格的な冬の到来を感じます。

その一方で、川に生息している魚は、冬になるとどのような暮らしをしているのでしょうか？

観察会などで「春・夏の暖かい時期の方が川には、たくさんの魚がいて、秋や冬になるといなくなってしまうのは、なぜですか？」というような質問を受けることがあります。

私たちにお馴染みのコイやギンブナなどは、水温変化が少ない、水深がある淵と呼ばれる深い場所に移動して、春の訪れを待つため、私たちの目につくことが少なくなります。

また、アユ（写真１）は水温が低くなり、日照時間が短くなってきている晩秋の11月頃になると産卵シーズンの最盛期を迎えます。この時期になると、アユは成熟（繁殖できるように体が成長する）し、体が黒くなる錆アユ（写真２）と呼ばれ、産卵が終わると、1年間の短いライフサイクルを完結します。

どうしても春や夏のように魚を探しても、冬は観察できる魚の種類

が少なくなってしまいます。

　ところで、冬にも関わらず、元気に泳ぎ回っているアユの成魚を水族館などの施設で見たことがある人は、多いのではないでしょうか？これには、大きな秘密があります。照明時間と水温をコントロールして、アユを成熟させないようにしているからです。具体的には、水温を常に20℃に設定し、照明を24時間付けぱっなしにしておきます。こうするとアユは常に季節を「夏」という風に感じて、成熟せず、本来は秋～冬にかけて死んでしまうアユの寿命を翌年の春くらいまで伸ばすことができます。

　秋や冬の川は魚が少なくなってしまいますが、冬を越した魚たちは、翌年の春頃には、コイやギンブナは浅場へ、アユは稚魚が戻ってきて、川は再び賑やかになります。

内水面試験場　非常勤水産職　嶋津 雄一郎

写真１ アユの成魚

写真２　錆アユ